

気のせい

セットン

そういえば3月。
そういえば卒業。
そういえば今日。

惰性で毎日を過ごしてきた僕にとっては関係のないことだ。

まわりが騒がしいけれどどうでもいい。

僕はただ消え去るようにいなくなればいいんだから。

思い出してみても何もない。

そもそも思い出すことなんてありはしない。

全部灰色。モノクロ。色なんてない。

こうしている今だって誰も僕に話しかけやしない。

そう。

僕は透明。確かに存在はしていても不可視の存在。

誰の目にも映ることはない。

誰も僕を見ることはない。

行事は僕の意味とは無関係に進行していく。

はたしてこんなことに何の意味があるのか。

一種の儀式には違いないが、絶対に必要というわけではないのではないか。

だったら出席しなければよかったんだ。

今更この場に存在することを後悔した。

今、遠くで呼ばれたような感じがした。
周りがそわそわしているが別にどうでもいい。
誰だっけ？ そんな奴いたか？
などと聴こえた気がするがそんなこと知らない。
ここは個人の感想を述べるべき場所ではないのだが。
珍しく真面目なことを考えてしまった。
あんな紙切れなんてただの資源の無駄じゃないか。
そんなものをもらって嬉しいのだろうか。子供じゃあるまいし。

歌。
宇多。
うた。
ウタ。
何回聞いても奇妙な響きにしか聞こえない。
どうしてかは自分でも分からないけれど。
この無意味な行事ではここが一番の山場であることくらい僕だって知っている。
でも僕は透明。世界とは断絶している。参加の義務はない。
ただそこにいるだけだ。
周囲では嗚咽やらすすり泣きやらが聴こえる。
果たしてそんな行為に何か意味があるのだろうか。
泣くことはストレスの解消だというけれどどうだろう。
この3年間の自らの愚行でも悔いているのか。
ともかくくだらないことだということに変わりはない。
感情の変化でさえ疎ましい。
この時僕は世界に明らかな拒絶を覚えたのだった。

ようやく解放された頃には陽が西側にずれこむ時間帯だった。

さて、もう用は済んだだろう。

静かに、そして虚しく消える時間だ。

教室。

廊下。

中庭。

昇降口。

なんの思い入れもない。

そして校門。

もうここをくぐることもない。

そう。もう終わり。

これで僕も晴れて自由になれるんだ。

と思いかけたその時。

「待って！」

その言葉は僕に向けられたものではないのだろう。

だって僕は透明...

がしっ。

腕を掴まれた。まさか。

そんなはずない。僕が見える人なんてここにはいない。

早くここから立ち去らないと。

「だから待ってよ」

どうやら僕に用があるみたいだ。

僕が見えるなんてきっと幻想かなんかを抱いている人に違いない。

「...人違い、ですよ」

しゃべったのなんて久しぶりだったからうまく発音できていただろうか。

「いやいや。君に用があるのだよ、西野君。」

僕の言葉を理解できないのか、目の前の人物は予想外の答えを返してきた。

そんな馬鹿な。なんで僕の苗字を知ってるんだ。

おかしい。僕は誰かに教えたことなんてないのに。どこで調べたのだろう。

「校門付近にいる学生服は君1人しか見当たらないんだけど？ それより卒業式はまだ終わってないってのは知ってる？」

だからこそ、このタイミングで僕は去ろうとしていたのだ。

それを邪魔するなんてそれこそそちらのほうが無粋というものではないのか。

「卒業生は在校生に見送られるイベントがあるんだよ。低いアーチとかくぐりたくもないのにくぐってあげなくちゃいけないの。いらなくても花とかもらってあげなきゃいけないの。校門出た瞬間に捨てちゃうんだとしても、ね。.....ねえ君、話聞いてないよね？ さっきから私ばかりしゃべってない？」

話を聞いてないのは僕じゃなくて目の前の君のほうじゃないか。

なんでもいいから早く腕を掴んでいる手を離して欲しい。

「女性の話はちゃんと聞くようにって学校で習わなかったのかなあ？ はいとりあえず行くよー」

それは確実に学校では教えてくれないだろう。一般常識ですらない。
そもそも僕はちゃんと話を聞いている。でなければこうやって考えることもない。
いや行行ってどこにいくんだ。僕はこれから帰らなければならないというのに。

「ほーら行くよー。きびきび歩く」

なぜ僕が連行される容疑者よろしく連れていかれなきゃならないのか。
何度か手を剥がそうとしたが、怪力なのか離すことは叶わなかった。
こうして僕は未だ騒がしい校舎へと再び戻る羽目になってしまった……。

【続？】